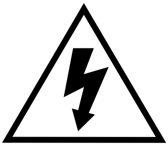
XD-V75 Digital Wireless

取扱説明書

http://line6.jp/manuals でも提供しています。

【重要】安全にお使いいただくために



注意

内部を開けないでください。
感電の恐れがあります。

警告：火災や感電を防ぐため、ねじ等を外さないでください。このなかに一般使用が可能な部品はありません。製品に問題がある場合は弊社までお問い合わせください。

警告：火災や感電を防ぐため屋外には置かず、水に触れないようにしてください。

保　証

本製品は米国連邦通信委員会（FCC）により定められたFCCルールの分類15に準拠しています。本製品は以下の二つの条件のもとで使用してください：(1) 本製品を有害な妨害行為に使用しないこと　(2) 意図されない動作を起こすものであっても干渉信号はすべて受信すること。

警告：Line 6が書面にて明確に許可している場合を除き、本製品を変更・修正すると使用権が無効となる場合があります。

無線周波数について：本製品を、他のアンテナやトランスミッターと同一場所に設置および同時に使用することは避けてください。

注意：本製品は米国連邦通信委員会（FCC）により定められたFCCルールの「クラスBデジタル機器」に準拠するようテストおよび製作されています。これらのルールは住宅への設置において有害な妨害・混信から合理的に保護されるよう定められています。本製品は電磁波を発生、使用、放射するため、取扱い説明書に従って使用されない場合には無線通信の障害の原因となることがあります。本製品がラジオやテレビの受信に障害を発生させる場合には、以下の方法をお試しください。なお本製品が原因かどうかを調べるには、本製品のスイッチをオン/オフしてご確認ください。

・受信アンテナの向きを変える、もしくは設置場所を変える
・本製品と受信アンテナの設置場所を離す
・本製品と受信アンテナを別回路のコンセントに接続する

このクラスBデジタル機器はカナダのICES-003およびNMB-003に準拠しています。

FCCルールに準拠していることを示すシールがTHH12バッテリーコンパートメントに付けられています。シールを確認するにはねじを時計回りにまわしてTHH12の底を外してください。

お読みください【重要】安全にお使いいただくために
本取扱説明書は安全な場所に保管しておいてください

XD-V75 Digital Wireless System をお使いいただくにあたり、本書をよくお読みください。

1. XD-V75 のマニュアル（本取扱説明書）に記載されている警告・注意事項に従ってください。
2. 本書に記載されている以外の使い方はしないでください。本製品が以下のような原因で故障した場合にはサポートサービス・修理が必要です。
   ・水などの液体がかかった、物が製品上に落下した
   ・製品が雨や湿気にさらされた
   ・異常な動作をする、パフォーマンスが著しく変化した
   ・製品を床に落とした、内部が破損した
3. 暖房器具、ラジエーター、その他の熱を発する機器など熱源のそばに置かないでください。
4. 製品内に物や液体が入らないようにしてください。水のそばでの使用や設置は避けてください。
5. コードは踏まないでください。コードの上に物を置かないでください。引っかかりやたるみの原因となります。プラグおよび製品に接続されている部分のコードには特に注意してください。
6. 湿った布以外で製品を拭かないでください。
7. 弊社指定の付属品やアクセサリー以外の物は使用しないでください。
8. 長時間にわたり大音量で音を聞き続けると回復不可能な難聴や聴力低下などの原因となる場合があります。常に「安全な音量」を心がけるようにしてください。

N222

2002/95/EC

20546/SDPPI/2011
3794

20544/SDPPI/2011
3794

ANATEL
Agência Nacional de Telecomunicações
1569-11-6586
(01)07899153000059

ANATEL
Agência Nacional de Telecomunicações
1773-11-6586
(01)07899153010271

XD-V75デジタル・ワイヤレス・マイク・システムをお買い上げいただきましてありがとうございます。本製品は洗練されたワイヤレス･システムでありながら、簡単に設定することができ、すぐにお使いいただけます。完全にデジタル化された通信システムを採用しているため、以前のアナログ･ワイヤレス製品とは異なる機能や特徴を備えていますが、従来のワイヤレス製品と同じように使用できます。いくつかの簡単なコンセプトを理解するだけで、優れたオーディオ品質、安全かつ途切れることのないシグナルが実現されるほか、干渉やその他の障害なく複数のワイヤレス･チャンネルを同時に使用することが可能になります。

- 2.4GHz帯域でのデジタル通信ー世界中でライセンス・フリーで使用可能
- UHF帯域における強力なテレビ放送機器からの干渉を回避
- デジタル技術によりコンパンダーを使用せずケーブル同様のオーディオ特性を実現ー24ビットのデジタル･コンバーター／最大120 dBAダイナミック・レンジ／帯域幅10Hzー20kHz
- 第4世代テクノロジーが信頼性の高くドロップアウトの無いパフォーマンスを実現
- 簡単に素早く設定：ゲイン、スケルチ、レベル調整不要
- 14チャンネルを同時使用可
- 通信距離90m
- 著名なボーカル・マイクのマイク・モデリング
- ヘッドセット、楽器、ラベリア・マイクはベルトパックEQモデルを採用
- トランスミッター／レシーバーの両方に正確なバッテリー残量インジケーターを搭載
- RF、リンクステータス、ダイバーシティ･モード、動作チャンネルなどの重要なパフォーマンス･パラメーターを表示するリアルタイムLCDインジケーター
- セキュアなデジタル暗号化（ユーザー選択可能）
- トランスミッター／レシーバーに詳細な設定メニューがあり、パラメーターの調整が可能
- アンテナ・ディストリビューションを内蔵し、ラックマウント可能な頑丈なデザイン

最高のパフォーマンスを得るために

- トランスミッターとレシーバー・アンテナの間に障害物がないようにしてください。通常はレシーバー・アンテナは頭の高さより高い場所におきます。
- 別のリモート・アンテナを使用しない場合、レシーバーをラックの下段に設置するのは避けてください。そのように設置しなくてはならない場合、レシーバーのアンテナをトランスミッターから見通せる位置に設置してください。
- コンピューター、ワイヤレス・アクセス・ポイントや電子レンジなどのようなRFを発生する機器の付近にレシーバーを設置するのは避けてください。
- アンテナは上向きに立て、ラックやラック・レールなどの金属の部分に触れないように45度に設置してください。
- トランスミッターのアンテナをブロックしないようにしてください。ハンドヘルド・トランスミッターの下部を包み込むように持たないようにしてください。ベルトパック・トランスミッターをポケットに入れるのは避けてください。

同梱されているコンポーネント

XD-V75 レシーバー(RX212)：レシーバー、9V/0.5A 外部ユニバーサル・パワー・サプライ、ショート・ラックマウント耳、ロング・ラックマウント耳（前部アンテナ設置用のDホール付き）、BNC to BNCコネクター×2、BNC to BNCケーブル×2、ジョイント付き半波長アンテナ（RDrac）×2、2台のレシーバーをラックマウント用に連結するためのダブテイル・パーツ、リアパネル固定用のスクエア・マウンティング・ブラケット、取扱い説明書

THH12 ハンドヘルド・トランスミッター：トランスミッター、単三アルカリ電池×2、マイクホルダー、ケース

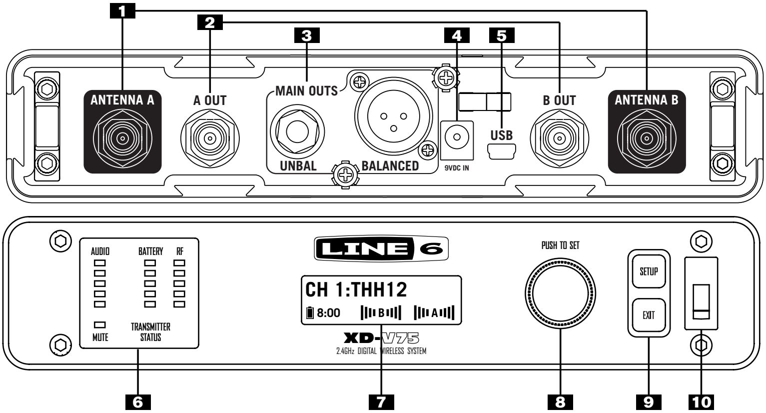
または

TBP12ベルトパック・トランスミッター：トランスミッター、単三アルカリ電池×2、ケース、オプションのウィンドスクリーンおよびクリップ付きのラベリア・マイク、ウィンドスクリーン付きのヘッドセット・マイク、ウィンドスクリーンおよびクリップ付きの楽器用マイク、もしくは1/4インチ端子付き楽器用ケーブルのいずれか楽器用標準ケーブル

注：弊社ではリモート・アンテナ、ケーブル、ケース、アンテナ・ディストリビューション・システムや単体のトランスミッターなど、XD-V75デジタル・ワイヤレス・マイクロフォン・システム用のさまざまな付属品を別途販売しております。詳しくは弊社Webサイト(www.line6.jp)をご覧ください。

XD-V75 デジタル・ワイヤレス・クイック・セットアップ

レシーバー



1. **アンテナ A & B インプット・コネクター(BNC)**
2. **アンテナ A & B アウトプット・コネクター(BNC)**ー複数のレシーバーをデイジーチェイン接続する際に使用
3. **アンバランス 1/4 インチおよびバランス XLR オーディオ・アウトプット・コネクター**
4. **9VDC パワー入力コネクター**
5. **USB コネクター**ーファームウェア・アップデート用
6. **トランスミッター・ステータス LED ディスプレイ**

   オーディオーオーディオ信号のレベルを緑で表示し、オーディオ信号がクリップすると一番上の赤い LED が点灯します。

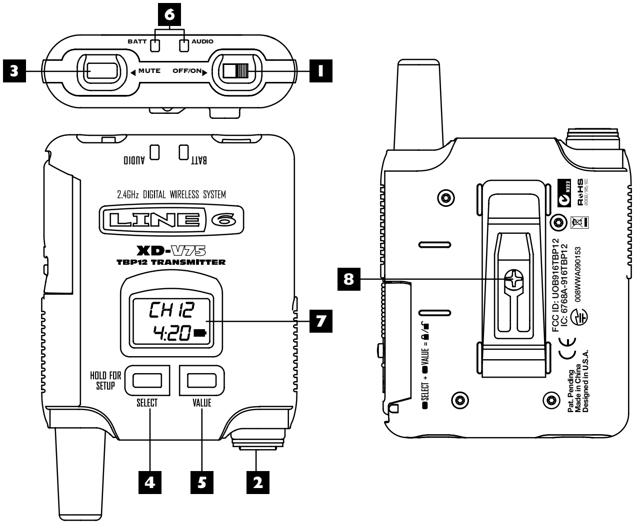
   ミュートートランスミッターがミュートされている場合に赤く点灯します。

   バッテリーー緑に点灯します。全てが点灯しているとトランスミッターのバッテリーがフルである事を示します。残り 1 時間で下の LED が赤く点灯し、残り時間が 40 分を切ると赤く点滅します。

   RFートランスミッターからの信号の強さ／質を緑で表示します。トランスミッターを切っている場合、そのチャンネルに干渉がある場合は赤く点灯します。
7. **LCD ディスプレイ・パネル**ーメインページにはチャンネル、トランスミッター、バッテリーおよびアンテナの強さが表示されます。プログラミング用のディスプレイとしても機能します。
8. **エディット／ロータリー・エンコーダー(セットするには押し込みます)**ーレシーバーのパラメーターを変更およびセットする際に使用します。
9. **セットアップ・ボタン／エグジット・ボタン**ーセットアップ・メニューにアクセスする時に使用します。
10. **レシーバー・パワースイッチ**

レシーバーにパワーサプライ・ケーブルを接続し、AC 電源を入れ、アンテナを接続してください。レシーバーの電源を入れ、**SETUP** ボタンを押し、**ロータリー・エンコーダー**を **SET CHANNEL** までスクロールします。選択するには押してください。使いたいチャンネルまでスクロールし、選択します。**EXIT** を押してください。オーディオケーブルでミキサーなどの機器に接続してください。以上でレシーバーが使用可能になりました。

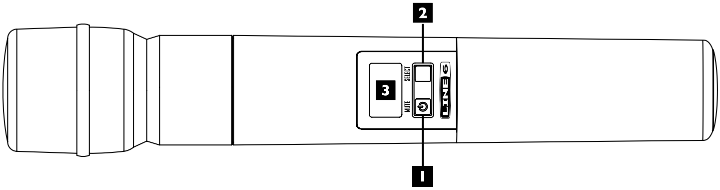
ベルトパック・トランスミッター



1. **オン／オフ・スイッチ**
2. **ミニXLR（TA4）インプット・コネクター**
3. **ミュートスイッチ**
4. **セレクト**
5. **バリュー**
6. **バッテリーおよびオーディオ・ステータスLED ー**バッテリーの状態が良好な場合、LEDは青色に点灯、低いと赤色に点灯、非常に低いと点滅します。オーディオレベルが良好な場合、LEDは緑色に点灯、クリップしている場合は赤く点灯します。
7. **LCDディスプレイ・パネルー**トランスミッターの電源を入れる際およびページを変える際にバックライトが一時的に点灯します。ミュートされているときは点灯し続けます。ディスプレイはプログラミングをする際にも使用します。
8. **ベルトクリップー**中心にあるマウンティング・スクリューを回し、必要に応じて位置の変更や取り外しを行ってください。

ベルトパックの側面のバッテリー蓋を開け単三電池を2本入れてください。**オン／オフ・**スイッチをスライドさせて電源を入れます。**セレクト**ボタンを2秒間押し続けているとLCDのスクリーンにCHとチャンネル番号が点滅します。**バリュー**ボタンを押して、レシーバーのチャンネルと同じになるように設定してください。**セレクト**ボタンを2秒間押し続けるとメイン画面に戻ります。以上でトランスミッターが使用可能になりました。

ハンドヘルド・トランスミッター

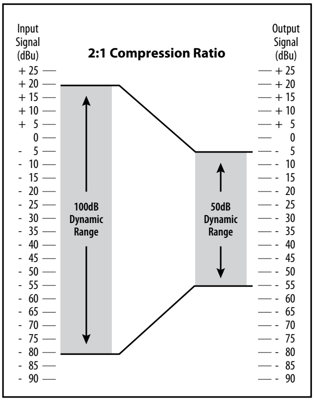


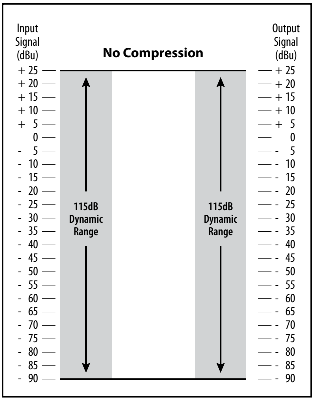
1. **パワー／ミュートボタン**ー電源を入れるには短く押し、切る場合は2秒間押し続けます。ミュートするには1秒間押し続け、ミュートを解除するには短く押します。セットアップモードに入っている場合はパラメーターを変更するために使用します。
2. **セレクトボタン**ーセットアップモードに入るには2秒間押し続けます。次のセットアップページに移動するには短く押します。2秒間押し続けると変更が保存され、セットアップ・モードから抜けます。
3. **LCD ディスプレイ・パネル**ートランスミッターの電源を入れる際およびページを変える際にバックライトが一時的に点灯します。ミュートされているときは点灯し続けます。ディスプレイはプログラミングをする際にも使用します。

トランスミッターの底面を外し、単三電池を2本入れてください。**オン／ミュート・**ボタンで電源を入れます。**セレクト**ボタンを2秒間押し続けているとLCDのスクリーンにCHとチャンネル番号が点滅します。**オン／ミュート**ボタンを押して、レシーバーのチャンネルと同じになるように設定してください。**セレクト**ボタンを2秒間押し続けるとメイン画面に戻ります。以上でトランスミッターが使用可能になりました。

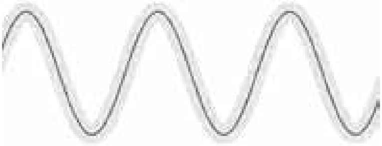
デジタル・ワイヤレスとは

通常のアナログ・ワイヤレス・マイクロフォン・システムでは、トランスミッターとレシーバー間の信号は、非常に高い周波数の搬送波がマイク（または他のトランスデューサー）からのオーディオ信号で常にわずかに変調されたもので構成されています。レシーバーでは電子回路によって搬送波が取り除かれ、オーディオ信号だけが残されます。これはFMラジオ放送で使用されている原理と同様で、送信時に大きく圧縮され、レシーバー側で伸張されます。「コンパンディング」（companding:「compressing」と「expanding」を組み合わせた言葉）の語源はここから来ています。アナログ伝送は他のRFや電磁信号の干渉による障害を受けやすく、干渉による障害が音として聞こえるだけではなく、受信できる距離が短くなったり、チャンネルを使用不可にしてしまう場合もあります。

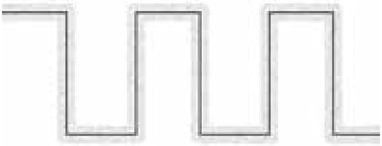




デジタル・ワイヤレス・マイクロフォン・システムは、はるかに安定した干渉に強いパフォーマンスを提供します。マイク・トランスミッター内で、歌または他のソースからのオーディオ信号はデジタル・サンプルされ、そのサンプルは電気的に1と0で表現できるデジタルの「ワード」に変換されます。アナログ・ワイヤレスと同じように非常に高い周波数の搬送波が変調されるのですが、CDがランドとピットで音楽を記憶しているように、デジタルのサンプルのストリームを搬送波は信号の代わりとなる2つの状態のみ扱えば良いことになります。レシーバーは搬送波からこの情報を取り出し、D/Aコンバーターによってデコードし、マイク側でエンコードされたオーディオ信号と全く同じものを出力します。



ノイズの乗ったアナログ信号



ノイズの乗ったデジタル信号

デジタル・ワイヤレスの利点

前述のように、アナログのワイヤレス送信は信号の強さや外部の電子機器、ワイヤレス信号によるさまざまなノイズや干渉の影響を受けやすいものです。こうした影響は元のオーディオ信号に余分なノイズとして搬送波に乗ってしまいます。またトランスミッターから送信された信号をピックアップするレシーバー側のアンテナは付近のRF周波数の信号を拾ったり、搬送波に干渉して新たな高調波を生み出したりするため、テレビ放送、他のワイヤレス・マイク、デジタル・シグナル・プロセッサー、調子の悪い蛍光灯やその他の電子機器など、さまざまなものの影響により不具合が引き起こされます。

搬送波に乗っているデジタル信号も同じような影響を受けるのですが、デジタル信号には2つの状態しかないため破損しにくいのです。レシーバー側でデジタルの1および0ではない信号が検知された場合、その情報は無視されます。

デジタルの「ワード」内にノイズが乗っていたとしても1または0としてデコードされます。アナログの場合、それは2つの中間の「何か」として認識されてしまいます。デジタルで送られてきた搬送波が十分なレベルでレシーバーのアンテナまで届けば、それは正確にデコードされます。CD プレイヤーやその他のデジタルのオーディオ機器のように、欠落した情報の隙間を埋めてくれる誤り修復のアルゴリズム等もあります。

通常のデジタル・ワイヤレス・システムでは、信号のレベルが低すぎるところまではクオリティが維持され、それ以下になるとその信号は失われます。デジタル・ワイヤレス・システムでは、干渉があるとトランスミッターとレシーバーアンテナ間の最大距離が短くなってしまうという問題があります。これを軽減するには、トランスミッターとレシーバーの間に障害物がない状態に（見通せるように）し、WiFi ルータ等のような障害を起こす機器類からレシーバーおよびレシーバー・アンテナを離して設置します。また、長距離で使用する場合はトランスミッターのセッティングを HI にするといいでしょう。

XD-V75 レシーバーのセットアップ詳細

スタンドアローンで使用する場合、フロントパネルとディスプレイが見えるように平らな場所に設置してください。付属の DC-1G パワーサプライを背面の **9VDC IN** に接続します（ケーブルが外れないよう、コネクターの上部にあるケーブルホルダーにケーブルで輪を作って押し込んでください）。パワーサプライを 90 ～ 240 ボルトの AC ソケットに接続してください。

外側左右にある **ANTENNA A** および **ANTENNA B** と表示された BNC コネクターに付属のジョイント付き半波長アンテナ（RDrac）を接続してください。リングを時計回りに 1/4 ほどまわし、アンテナの角度は「うさぎの耳」のようになるよう約 45 度に合わせてください。ラックマウントする場合や複数のレシーバーを設置する場合は「アンテナの取り付けと配置」をご覧ください。

フロントパネルの右側にあるパワースイッチを入れるとディスプレイが点灯します。**SETUP** ボタンを押してください。2 行のディスプレイの上部に［SELECT FUNCTION］と表示され、**ロータリー・エンコーダー**をまわすとエディット可能な項目のリストをスクロールすることができます。［SET CHANNEL］までスクロールし、**ロータリー・エンコーダー**を押して選択してください。**SETUP** ボタンを押して選択することも可能です。

注：時計回りにまわすとリストの下へスクロールし、反時計回りにまわすとリストの一番上まで戻ります。

［SET CHANNEL］のエディットページには現在選択されているチャンネルが表示されます。チャンネルを変えるにはエンコーダーをまわしてください。現在選択されているチャンネル以外のチャンネルが点滅します。新しいチャンネルを選択するには**ロータリー・エンコーダー**を押してください。

注：レシーバーの RF チャンネルは**ロータリー・エンコーダー**が押されるまで新しい周波数には変わりません。

ハンドヘルドまたはベルトパックのトランスミッターを同期させるには下記のトランスミッター・クイック・セットアップをご覧ください。チャンネルのスキャンや複数のワイヤレス・ユニットを使用される場合は「チャンネル・スキャンの手順」、「範囲と干渉のテスト」、「ニア／ファー・トランスミッター・エフェクトを最小限に抑える」をご覧ください。

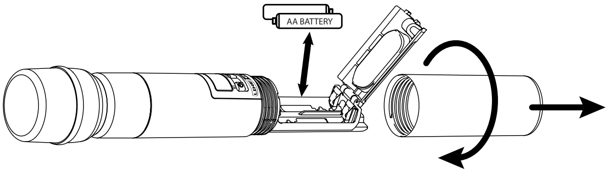
ミキサーやその他のオーディオ機器に送るレシーバーのアウトプットレベルを調整するには「オーディオアウトプットおよびフィルターの調整」をご覧ください。

注：レシーバーには三つのディスプレイ・モードがあります。メインページには現在選択されているチャンネル、トランスミッターの名前または番号、バッテリーの残量、およびアンテナ A と B の感度が表示されます。［SELECT FUNCTION］ページでは、レシーバーのエディット可能なリストをスクロールすることができます。エディットページでは現在選択されている機能をエディットすることができます。ユーザーが操作可能なのは、**SETUP** および **EXIT** ボタンを押すこと、および**ロータリー・エンコーダー**を回すか押すことのみです。

THH12 ハンドヘルド・トランスミッターのセットアップ詳細

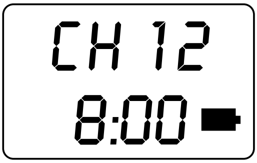
まず THH12 トランスミッターの下部を反時計回りにまわして外してください。親指の爪で軽くバッテリーカバーを引き、後ろに引っ張って開けてください。カバーはトランスミッターの底にヒンジでつながっています。バッテリー・コンパートメントに記載されている極性に注意しながら単三電池を2本入れてください。

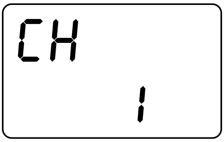
注：アルカリ電池または 2400 ～2800mAh の充電式 NiMH 電池をお使いください。詳しくは「バッテリーレベル・インジケーター機能」をご覧ください。

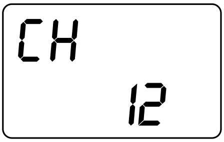


バッテリーカバーを閉じてトランスミッターの下部を元に戻してください。ディスプレイの下にある **ON/MUTE** ボタンを少しの間押し続けます。上の行には現在選択されているチャンネル、下の行にはバッテリーの残量が表示されます。バックライトは一時的に点灯した後、すぐに消えます。

注：トランスミッターのボタンは間違って押してしまわないように埋め込んであります。カチっと音が聞こえるまで強めに押してください。ボールペンなどの先がとがった物は使用しないでください。







トランスミッターは、ご使用のレシーバーと同じチャンネルに設定されている必要があります(例：レシーバーのチャンネルが 9 である場合、トランスミッターのチャンネルも 9 にする)。**SELECT** ボタンを2秒押し続けると上段に CH と表示され、下段に現在選択されているチャンネルが表示されます。**ON/MUTE** ボタンを押すとチャンネルが 1 から14 へとひとつずつ上がって行き、チャンネル番号が点滅します。使用したいチャンネルで **SELECT** ボタンを2秒押し続けます(もしくは15秒間なにもしないでください)。これにより、トランスミッターは新しく選択された周波数に変わり、メインのディスプレイに戻ります。レシーバーのディスプレイを見て、トランスミッターの信号を受信していることを確認してください。

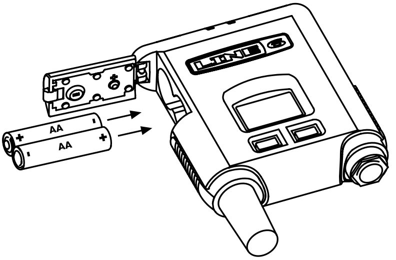
トランスミッターがオンの時、**ON/MUTE** ボタンを押すとマイクからのオーディオがミュートされ、バックライトが点灯します。ディスプレイには［MUTE］と表示されます。もう一度押すとミュートが解除されます。このほかにも、THH12トランスミッターにはパワーモードのハイおよびロー、マイク・モデルの選択、暗号化オプション、トランスミッターに6文字までの名前をつけ、トランスミッターおよびレシーバーのディスプレイにそれを表示させる機能など、さまざまなエディット可能な機能があります。詳しくは「マイク・モデルの設定」および「暗号化の設定」をご覧ください。

注：トランスミッターをロックし、使用中に誤って設定が変更されてしまうこと（もしくは故意の変更）を防ぐことができます。ロックをかけるには、トランスミッターの下部を外し、バッテリー・コンパートメントの裏側にある小さなマイクロスイッチを右に動かします。ディスプレイの左下に錠の絵が表示され、ボタンを押すと[LOCKED]と表示されます。トランスミッターの下部を元に戻してから使用してください。ロックを解除するにはスイッチを左に動かします。ロックが外れて編集可能となり、トランスミッターを切ることができるようになります。

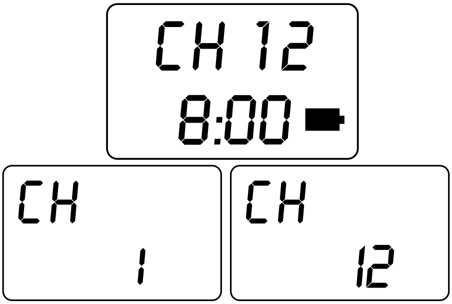
TBP12ベルトパック・トランスミッターのセットアップ詳細

まずトランスミッターの左側（アンテナや**OFF/ON**スイッチと同じ側）にある楕円形の小さなバッテリーロック・ボタンを押し、ゴム製の長方形のラッチをスイッチ側へ滑らせてください。バッテリードアが開くので、ドアに記載されている極性に注意しながら単三電池を2本入れてください。バッテリードアを閉じ、バッテリー・ラッチを元の位置に戻してください。**OFF/ON**スイッチをONにすると、ディスプレイには現在選択されているチャンネルと電池の残量が表示されます。

注：アルカリ電池または2400～2800mAhの充電式NiMH電池をお使いください。詳しくは「バッテリーレベル・インジケーター機能」をご覧ください。



ベルトパック・トランスミッターにはラベリア、ヘッドセット、楽器用マイクや1/4インチのケーブルを接続するためのTA4M（ミニXLRオス）の4配線コネクターが用意されています。マイクをベルトパックで使用するには、TA4F（ミニXLRメス）のコネクターが必要です。容易にベルトパックにはまるようコネクターを合わせて押し込んでください。外す場合はTA4Fコネクターの横に付いているボタンを押し、まっすぐ引き抜いてください。ラベリアおよびヘッドセットマイクに関する詳しい情報は「マイク使用のコツ」をご覧ください。



トランスミッターは、ご使用のレシーバーと同じチャンネルに設定されている必要があります(例：レシーバーのチャンネルが9である場合、トランスミッターのチャンネルも9にする)。**SELECT**ボタンを2秒押し続けると上段にCHと表示され、下段に現在選択されているチャンネルが表示されます。**VALUE**ボタンを押すとチャンネルが1から14へとひとつずつ上がって行き、チャンネル番号が点滅します。使用したいチャンネルで**SELECT**ボタンを2秒押し続けます（もしくは15秒間なにもしないでください）。これにより、トランスミッターは新しく選択された周波数に変わり、メインのディスプレイに戻ります。レシーバーのディスプレイを見て、トランスミッターの信号を受信していることを確認してください。

トランスミッターがオンの時、**MUTE** ボタンを押すとオーディオがミュートされ、バックライトが点灯します。ディスプレイには[MUTE] と表示されます。もう一度押すとミュートが解除されます。このほかにも、THH12トランスミッターにはパワーモードのハイおよびロー、マイク・セッティングの選択、暗号化オプション、トランスミッターに6文字までの名前をつけ、トランスミッターおよびレシーバーのディスプレイにそれを表示させる機能など、さまざまなエディット可能な機能があります。詳しくは「マイク・モデルの設定」および「暗号化の設定」をご覧ください。

XD-V75 レシーバーの接続

レシーバーにはバランス XLR およびアンバランス（標準）コネクターが用意されています。ミキサーやパワー・ミキサーに接続するには、レシーバーのアウトプットからマイク・ケーブルでミキサーのマイク・レベルのインプットへ（普段マイクをワイヤードで使用するのと同じように）接続してください。[NORMAL（＋0dB）] セッティングの場合、XD-V75 レシーバーのアウトプットはトランスミッター側のマイクのレベルとほぼ同一です（THH12 ハンドヘルド・トランスミッターで選択されているモデルのアウトプットもモデル通りエミュレートされています）。必要に応じて［SELECT FUNCTION：OUTPUT ADJUST］で－18dB から＋12dB まで 1dB 単位で調整することもできます。詳しくは

「オーディオアウトプットおよびフィルターの調整」をご覧ください。

アンプやエフェクト等1/4インチコネクターをその他の機器に接続するには、1/4インチのシールドをお使いください。アウトプット・レベル調整はこのコネクターにも使用できます。

注：アンバランス・アウトへの接続に TRS バランスケーブルを使用しないでください。TRS のリング部分は他の Line6 ワイヤレス製品とデジタル交信するために使用されているため、このように TRS を接続した場合、ミキサーのバランス・インプットにデジタルノイズが発生する可能性があります。このオーディオ・アウトプットの使用にはアンバランスの 1/4 インチ・ケーブルのみ推奨されます。

他の Line 6 ワイヤレス機器との互換性

XD-V75 は当社の最新のデジタル・ワイヤレス・トランスミッション方式を使用しており、XD-V35 に加え、Relay™ G30、Relay™ G50、バージョン 2 の RF2 モードで動作している Relay™ G90 と完全なチャンネル互換性があります。これらのモデルの機器は、それぞれが独自のチャンネルで使用され、14以上が同時に使用されない限り、同じ場所で混合して使用することが可能です。

また XD-V75 レシーバーは、現在は RF1 モードと呼ばれるようになったソフトウェア・バージョンで動作する XD-V30、XD-V70、Relay™ G30、Relay™ G50、Relay™ G90 など、旧世代の Line 6 ワイヤレス製品からの送信も受けることができます。ただし、チャンネルの周波数に互換性がないため、RF1 と RF2 を混合させて使用することは推奨されません。

すでに RF1 モードで使用されているセットアップに XD-V75 を追加した場合、XD-V75 の USB ポートにインターネットに接続されているコンピューターを接続し、古い機種をRF2モードで動作するようにアップデートすることができます。詳しくは「ファームウェア・アップデートの手順」をご覧ください。逆に古い Line 6 のレシーバーと一緒に使用したい場合、XD-V75 のトランスミッターを RF1 モードで使用するように変更することも可能です。THH12 および TBP12 トランスミッターを RF1 モードに設定するには、セットアップ・モードで現在のチャンネルを表示させ、THH12 の場合は **SELECT** ボタンを押しながら **ON/MUTE** ボタンを、TBP12 の場合は SELECT ボタンを押しながら **VALUE** ボタンを押して放してください。どちらのモードで動作しているかは［XD-V75 RF1］または［XD-V75 RF2］のようにディスプレイ内に表示されます。この設定は電源を切ったあとも保持されるので、電源を入れるたびにリマインダーとして［RF1 or RF2］と表示されます。XD-V75 レシーバーには、RF1 のトランスミッターと交信していることを示すため、ディスプレイの右側に [To] と表示されます。

チャンネル・スキャンの手順

Line 6ワイヤレス・マイクロホン・システムは、2.4GHzのアンライセンス・バンド（多くのワイヤレス・マイクロホン・システムや携帯電話等で使用されている周波数より高い周波数）で動作していますが、この周波数はほかに全く使われていない訳ではなく、WiFiルーターなどで使用されています。レシーバーには高性能なスキャン機能が装備されており、特定のチャンネルの性能を落としてしまうようなその他のワイヤレス機器がないかを確認できるようになっています。これによって使用するワイヤレス・マイクのチャンネルが他のワイヤレス機器と干渉しないようにすることができます。干渉を最小限に抑えるため以下の手順に従ってください。以前からお使いのLine 6システムに新たにワイヤレス・ユニットを加える場合は、周波数を検知するため、まず既存のトランスミッターの電源を入れてください。

レシーバーの**SETUP**ボタンを押してください。［SELECT FUNCTION］画面が出ますので、**ロータリー・エンコーダー**で［CHANNEL SCAN］までスクロールし、**ロータリー・エンコーダー**を押してスキャンを開始します。約6秒後、ディスプレイの下段には1から14のチャンネル番号が表示され、その上にはステータスが表示されます。それぞれの表示は以下を示しています。

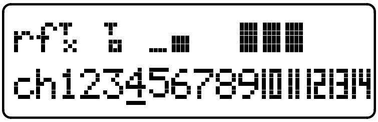
Blank	RFほとんどなし／まったくなしー使用するのに最適のチャンネル
	XD-V70クラスのトランスミッターがそのチャンネルを使用中（またはV1.0テクノロジーの他のLine 6ワイヤレス・システム）
	XD-V75クラスのトランスミッターがそのチャンネルを使用中（またはV2.0テクノロジーの他のLine 6ワイヤレス・システム）
	Line 6以外の低いRFレベルー比較的レンジに影響がなく使用できるチャンネル
	Line 6以外の中位のRFレベルーこのチャンネルを使用するとレンジが狭くなるでしょう
	Line 6以外の高いRFレベルーこのチャンネルを使用するとかなり使用に障害が起きるでしょう

現在選択中のチャンネル番号には下線が付きます。

注：レシーバーがチャンネル・スキャンのページに入っている場合、オーディオは聞こえません。オーディオを再開するには、**ロータリー・エンコーダー**でチャンネルを選択するか、**EXIT**ボタンでそのページから出てください。

ロータリー・エンコーダーでチャンネルのリストをスクロールすると、点滅している下線がチャンネル番号を追います。未使用のチャンネルをハイライトし、**ロータリー・エンコーダー**を押して選択してください。レシーバーのディスプレイはメインページに戻り、新しいチャンネル番号が表示されます。

注：RFの状態に関わらず、すべてのチャンネルを選択することが可能です。しかしRF干渉が深刻なチャンネルを選択すると、そのトランスミッターのレンジがかなり狭くなる可能性があります。



トランスミッターの電源を入れ、クイック・スタート・セクションに記載されている手順に従ってレシーバーと同じチャンネルに設定してください。複数のレシーバーおよびトランスミッターを設定したい場合、各セットの電源を入れたまま次のレシーバーでスキャンし、新たな未使用のチャンネルを選択してください。または最初のレシーバーでスキャンした結果から「RFほとんどなし／まったくなし」である未使用のチャンネルのメモを取り、残りのレシーバーおよびトランスミッターを設定してください。

注：電源が入っているLine 6 TX機器と、スキャン中のRXアンテナが少なくとも2メートルは離れているようにしてください。これによりオーバーロードを防ぎ、誤ったスキャン結果が出ることを避けることができます。

オーディオアウトプットおよびフィルターの調整

レシーバー・アウトプット・レベルの調整

XD-V75のレシーバー・アウトプットの初期値は＋0dB（ユニティ・ゲイン）です。これによりワイヤレスのアウトプットをワイヤード・マイクと同じレベルにし、ミキサーのマイク・レベル・インプットを使用することが可能になります。レベルを上げる、または下げる必要がある場合は、以下の手順で行ってください。

```
OUTPUT ADJUST:
  +0dB (NORM)
```

SETUPボタンを押し、**ロータリー・エンコーダー**で［SELECT FUNCTION］から［OUTPUT ADJUST］までスクロールしてください。選択するには、**ロータリー・エンコーダー**を押してください。ディスプレイの下段には－18dBから＋12dBまでの数値が表示されます。初期値では［NORMAL（＋0dB）］と表示されており、時計回りで上げ、反時計回りで下げに1dBずつ変更できます。

希望の数値で**ロータリー・エンコーダー**を押して選択すると、メイン画面に戻ります。**ロータリー・エンコーダー**をまわしてゲインを上下させると直ちにレベルの変更が反映されます。

通常は［NORMAL］（ユニティ・ゲイン）を使用し、ミキサーのトリム、ゲインやフェーダーによってレベルをブースト（上昇）させたり、低くしたりします。大抵の場合、このセッティングが一番SN比のいい結果となります。ワイヤードとワイヤレスのマイクが混合している場合も、［NORMAL］を使うことによってチャンネルのフェーダーやトリムなどを同じように設定できます。お使いのミキサーにチャンネル・フェーダーしかなく、トリムやゲインのコントロールがない場合、レシーバー側でわずかに調整してもいいかもしれません。

注：レシーバーのアウトプット・レベルを最大の＋12dBに上げてもラインレベルまで上がりません。ミキサーのマイク・レベル（ミキサーのインプットまたはワイヤレスの次につなぐ機器）でレベルを調整してください。

レシーバーのアウトプット・レベルをブーストするとヘッドルームが狭くなってクリップし、マイクのピークで歪んでしまいます。通常、レシーバー側でゲインを加える理由として、マイクを使用している人が非常に小さな声で話している、マイクからかなり離れているなどミキサー側でコントロールするより都合がいい、もしくはレシーバーからの信号が送られる器材にレベルを調整するコントロールが付いていないなどが考えられます。こうした状況が改善されたら［NORMAL］に戻してください。

アウトプット・レベルを下げるとSN比が悪くなり、スピーカーから流れる音にヒスなどのノイズが聞こえやすくなります。通常、レシーバー側でレベルを下げるのは、レシーバー・アウトプットがお使いのミキサーやオーディオ機器のインプットをクリップしてしまい、更にミキサー側でアッテネーターが付いていない場合ぐらいでしょう。

注：オーディオのゲインステージングの基本は、インプット側でクリップしない程度に各ステージでなるべく高いゲインを送るということです。この過程はマイクの段階で始まるため、マイクから離れすぎない、小さすぎる声で話さないと言った点に気をつけることで最初から良い信号を送ることができます。また次のゲインステージであるXD-V75を［NORMAL］に設定することで、クリップしない適正なレベルを送ることができます。その次のステージでは、ミキサーのトリムまたはゲインコントロールをピークでクリップしないよう設定します。その後にチャンネル・フェーダー、次にサブグループ・フェーダーまたはアンプにつながるミキサーのメイン・アウト・レベルです。こうして各ステージで最適なレベルを得ることによりアンプ側で無理にレベルを上げる必要がなくなるため、電子的ヒスやノイズを抑えつつ目的とする信号を増幅することができます。

ダイナミック・フィルターの調整

ダイナミック・フィルターは[OFF](フィルターなし)、[NORM](音楽で使用)と[TALK](スピーチなどで使用)から選択することができます。起動させると、フィルターのダウンワード・エクスパンダーやダイナミック・ハイパス・フィルターを使用することにより、ハンドリング•ノイズやステージの振動などを最小化します。[NORM]モードでは、マイクのインプットレベルが設定されたスレッショルド以下になると、全体のレベルが約6dB落とされると同時に200Hz以下の周波数も削られます。[TALK]モードでは、スピーチなどで使用される場面に最適なレベル•リダクションが増加されます。

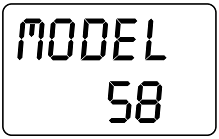
ダイナミック・フィルターの設定を変更するには、レシーバーの**SETUP**ボタンを押し、[DYNAMIC FILTER]までスクロールします。**ロータリー・エンコーダー**を押して選択し、任意の設定までスクロールしてください。**ロータリー・エンコーダー**を押して設定を選択するとメインメニューへ戻ります。ダイナミック・フィルターは選択と同時にアクティブになります。

注:マイクが口の近くにない、パフォーマーが低い音量で話している/歌っているような場合、ダイナミック・フィルターを[OFF]にした方が良い結果となることがあります。

マイク・モデルの設定

THH12ハンドヘルド・トランスミッターでのマイク・モデルの選択

THH12ハンドヘルド・マイクは多くの人気ボーカル・マイクのモデルを選択することができ、音質、周波数特性や出力レベルなどが再現されています。Shure® SM58®、Beta58®、SM57®、Sennheiser® e835、e935、Audio-Technica® AE4100、Electro-Voice® N/D767a、Audix® OM5、AKG® D5などのモデルがあります。



注:これらのモデルはLine 6マイク・エレメントのレスポンス・パラメータをベースにし、上記のマイクの特徴を形づくるものです。軸外特性や極性パターン、近接効果などマイクによる物理的な特徴はひとつのマイク・エレメントでは再現することはできません。

マイク・モデルを選択するには、ディスプレイでチャンネル設定の画面が出るまで**SELECT**を押し続けてください。さらに**SELECT**を2回押して[MODEL]のページに行きます。現在選択されているマイク・モデルを示す2桁または3桁の文字が表示されます。**ON/MUTE**ボタンを押すと、1クリックに付き1つずつ選択可能なモデルが点滅表示されます。**SELECT**ボタンを押すか(ディスプレイには次の選択オプションが表示されます)約15秒何も押さないでいるとモデルが選択されます。

ディスプレイ	メーカー	モデル
L6	Line 6	Custom
58	Shure®	SM58
b58	Shure®	Beta 58
57	Shure®	SM57
835	Sennheiser®	e835
935	Sennheiser®	e935
41	Audio-Technica®	AE4100
767	Electro-Voice®	N/D767a
o5	Audix®	OM5
d5	AKG®	D5

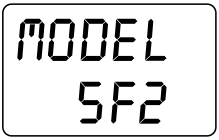
注：ワイヤードとワイヤレスが両方使用される現場では、このモデリングを使用することにより、多くのワイヤードによく似たワイヤレス・マイク・モデルを選択することが可能になります。オーディオ・システム全体にグローバルなEQ設定をする際に、異なるマイクの周波数特性から来るフィードバックの可能性を軽減させられるはずです。

＊以下に記載されている製品名は各所有者の商標であり、Line 6と関連もしくは提携関係にあるものではありません。これらのメーカーの商標は、Line 6のサウンドモデル開発の際に研究されたトーンやサウンドのメーカーによる製品を識別する目的でのみ使用されています。SHUREおよびSM58はShure Incorporatedの登録商標です。SennheiserはSennheiser Electronic Corpの登録商標です。AudixはAudix Corporationの登録商標です。Audio-TechnicaはAudio-Technica Corporationの登録商標です。Electro-VoiceはTelex Communications, Incの登録商標です。AKGはAKG Acoustics GmbHの登録商標です。

TBP12ベルトパック・トランスミッターでイコライザー・モデルの選択

TBP12ベルトパック・トランスミッターは、さまざまなラベリア、ヘッドセット、楽器用マイクや1/4インチの楽器用ケーブルで使用することができます。Line 6が提供しているマイクもあります。TA4Fコネクターと正しい配線により、ほとんどのマイクを使用することが可能です。さまざまな状況でマイクのパフォーマンスを最大化するためのイコライジング・モデル・セットも多数用意されています。

注：このマニュアルの最後に記載されている別表の「TA4F配線手順」をご覧ください。



ラベリア、ヘッドセットまたは楽器用マイクなどのイコライザー・モデルを選択するには、ディスプレイでチャンネル設定の画面が出るまで**SELECT**を押し続けてください。さらに**SELECT**を2回押して[MODEL]のページに行きます。現在選択されているEQモデルを示す3桁の文字が表示されます。**VALUE**ボタンを押すと、1クリックに付き1つずつ選択可能なモデルが点滅表示されます。**SELECT**ボタンを押すか（ディスプレイには次の選択オプションが表示されます）約15秒何も押さないでいるとモデルが選択されます。

名前	応用	説明
SF1	スピーチ・フィルター1	緩いハイパス
SF2	スピーチ・フィルター2	緩いハイパス、ハイカット
SF3	スピーチ・フィルター3	控えめのハイパス、ハイカット
SF4	スピーチ・フィルター4	緩いハイパス、ミッドカット、ハイカット
SF5	スピーチ・フィルター5	控えめのハイパス、ミッドカット、ハイカット
SF6	スピーチ・フィルター6	積極的なハイパス、ミッドカット、ハイカット
IF1	楽器フィルター1	ギターケーブルの高域カット
IF2	楽器フィルター2	木管楽器のエンハンス
IF3	楽器フィルター3	管楽器のエンハンス

マイク使用のコツ

ユーザーがマイク・エレメントに向かって直接話したり歌ったりするハンドヘルド・マイク（マイクと人間の両方のフル周波数特性が得られる）とは異なり、ラベリア・マイクは体のさまざまな部分に取り付けて使用します。口の位置から遠かったり、低かったり、横にずれることで音量は通常よりかなり低くなる上、マイク・エレメントに近い状態に比べて高低の周波数特性も不足します。こうした場合、中域が強調されます。声のレベルを上げるためにゲインを上げると無関係のノイズが拾われ、かつそれが増幅されてしまいます。

ラベリア・ユーザーの声を「自然」に聞こえるようにするには、場合によっては大幅なイコライザー補正が必要です。特に大音量でのライブ状況では、フィードバックなどの問題を伴います。マイクの位置とEQを調整すること、そしてトランスミッターのEQモデルがその処理をサポートすることで、使用に適した良いサウンドを作り出すことができ

ます。

ユーザーの口元とマイクの距離や位置関係を一定に保つようにしてください。演劇の舞台などでは、よくマイクを髪の生えぎわ（頭の横または耳の上）につけています。 襟や肩にマイクをつけると、頭の回転によって音量の差が生じてしまいます。こういう症状を最小限に抑えるために色々と試してみてください。マイクを胸の中心につけると音量の差は改善しますが、距離がかなりあるために声のダイレクトなエネルギーが遮られてしまい、中域が強い「チェスト」音質になってしまいます。

無指向性のマイクでは拾ってしまう音でも、単一指向性（カーディオイド）のラベリア・マイクを使用することでバックグラウンド・ノイズからユーザーの声を分離して拾うことができます。このマイクはユーザーの頭の動きにより敏感で、マイクの正面から離れると音量の差が激しくなります。また無指向性のマイクに比べてハンドリングやケーブル・ノイズが乗りやすい傾向があるため、動作に気をつけないといけません。 TBP12 ベルトパック内のラベリア EQ モデルには、無関係なノイズの排除をサポートするハイパス・フィルター（ローカット）が備わっています。

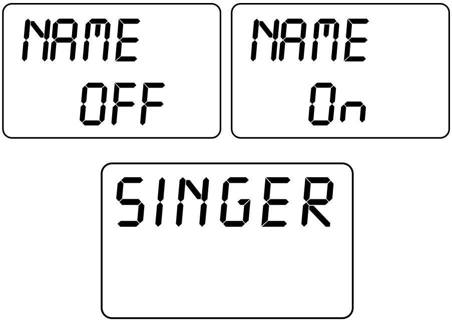
適切に使用すれば、ヘッドセット・マイクは音量、周波数特性の低減、フィードバック、ハンドリング・ノイズ、バックグラウンド・ノイズなどの問題を解決してくれます。手頃な価格のものも多数あります。ブレスやポップノイズを避けるためには、マイクのウィンドフィルターを使用し、マイク・エレメントを口の端に設置してください。

生音ではなく録音および放送、またはユーザーとスピーカーの距離が離れている場合は大幅なイコライジングが可能なため、より自然な音質を作りやすくなります。

トランスミッターのその他の機能の設定

トランスミッターに名前をつける

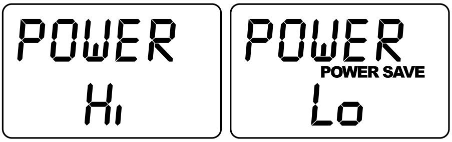
初期設定としてハンドヘルド・トランスミッターは[THH12]、ベルトパックは[TBP12] という名前がつけられています。トランスミッターには6文字までの名前をつけることができ、それをトランスミッターおよびレシーバー側で簡単に確認することができます。[NAME] 機能で LCD ディスプレイのメイン画面に表示される 6 文字までの名前をつけると、レシーバーのディスプレイのメイン画面にもそれが表示されます。文字はアルファベットと数字（ダッシュと空白も可能）を使用することが可能なので、ユーザーの名前や役割などのわかりやすい名前をつけることができます。



トランスミッターに名前をつけるには、ディスプレイでチャンネル設定の画面が出るまで **SELECT** を押し続けてください。 さらに **SELECT** を 4 回押して [NAME] のページに行きます。 初期設定は [OFF] になっています。 ハンドヘルドでは **ON/MUTE**、ベルトパックでは **VALUE** を押して[ON] にしてください。 **SELECT** ボタンを押すと初期設定の名前（すでに名前がつけてある場合はトランスミッターの名前） が表示され、 一文字目が点滅します。 **ON/MUTE** または **VALUE** ボタンを繰り返し押して英／数のリストをスクロールすることができます。 目的の文字または数字で **SELECT** ボタンを押して選択し、 次の文字に進みます。 最後の文字を選択した後に **SELECT** ボタンを押し、 メイン画面に戻ります。 トランスミッターの画面に名前が表示されるほか、 それがレシーバーに送信され、 レシーバーの LCD のメイン画面にも表示されます。

トランスミッターのパワー・レベルの選択

Line 6デジタル・トランスミッターではロー・パワー・トランスミッションを選択することができるため、WiFiやほかの2.4GHz機器と一緒に使用する際の干渉の最小化、およびレシーバーのアンテナの近くで使用する際の電池の持続時間を延長することができます。隣接する会場やステージなどで、ワイヤレスで同じチャンネルを使用している場合、ロー・パワー・トランスミッションにすることによって各場所でお互いの干渉を受けずに使用することが可能になります。最大レンジで使用する場合は初期設定のハイ・パワーをご使用ください。

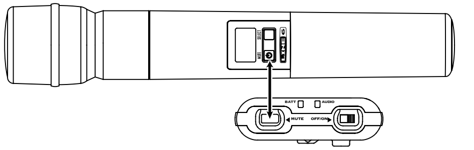


トランスミッターのパワーを設定するには、ディスプレイでチャンネル設定の画面が出るまで**SELECT**を押し続けてください。さらに**SELECT**を1回押して［POWER］のページに行きます。ハンドヘルドでは**ON/MUTE**、ベルトパックでは**VALUE**を押して［HI］と［LO］（Power Save）を切り替えられます。**SELECT**ボタンで選択し、メイン画面に戻ります。

注：トランスミッターがLOの設定で到達距離不足または干渉を感じた場合は、HI設定にして範囲を広くしてください。またトランスミッターとレシーバーの距離を近くしてアンテナが見通せるようにするか、干渉の少ない別の周波数に切り替えてみてください。

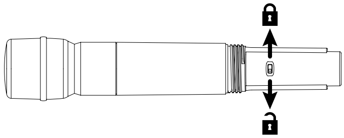
トランスミッターのロック、ロック解除およびミュート

THH12およびTBP12は、取り扱いの際に誤ってボタンを押してしまうことを避けるためにロックすることができます。ロック中はミュート、電源のオフ、周波数の切り替え、その他の設定などを変更することができなくなり、トランスミッターのエラーによる問題が発生しないので安心です。使用後は簡単にトランスミッターのロックを解除し、電源を切ったり設定を変えることができます。ロックをかけていない場合、ミュートしてオーディオを一時的に無効にしながら送信し続けることもできます。

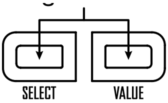


THH12ハンドヘルドでは、**ON/MUTE**ボタンをクリックするまで押すとミュートされ、もう一度押すとミュートが解除されます。トランスミッターの名前の代わりに［MUTED］と表示され、バックライトが点灯します。TBP12ベルトパックでミュートするには、パックの上部の**MUTE**ボタンを押し、もう一回押すと解除されます。ディスプレイはハンドヘルドと同じように機能します。マイクがミュート中に別のパラメーター・ページに行くために**SELECT**ボタンを押すと、リマインダーとしてディスプレイの左中央に［MUTED］と表示されます。トランスミッターが［MUTED］状態の場合、レシーバー側に赤い**MUTE LED**が点灯します。

THH12ハンドヘルドをロックするには、電源を入れ、設定が全て完了しているか、そしてレシーバー側で信号を受信しているかを確認してください。バッテリー・コンパートメントの下部を外し、背面のマイクロスイッチをロックのマークの方に向かって右に動かします。確認のため**ON/MUTE**または**SETUP**ボタンを押すと、ディスプレイのライトが一時的に点灯して［LOCKED］という文字が上段に表示されます。ロックを解除するには下部を外しスイッチを左に戻します。

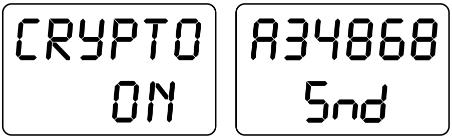


TBP12ベルトパックをロックするには、電源を入れ、設定をおよびレシーバー側で信号を受信しているかを確認してください。2本の指で**SELECT**と**VALUE**のボタンを同時に2秒間押し続けてください。[LOCKED]の文字がディスプレイの上段へ一時的に表示され、メイン画面に戻ります。確認のため、ほかのボタンを押してみてください。ロック中は**OFF/ON**スイッチも一時的に使用不可能になります。ロックを解除するには**SELECT**と**VALUE**のボタンを2秒間押し続けてください。



暗号化の設定

XD-V75デジタル・ワイヤレス・マイクロフォン・システムはトランスミッターからのオーディオに24ビットの暗号コード(1600万以上のコードがあります)を適用し、関連しているレシーバーとの交信を保護することができます。機密情報を扱うミーティングや会議でワイヤレスを使用する際、暗号化することによりオーディオ信号が拾われ解読されてしまうことを避けることができます。マイク・エレメントが受信したオーディオはトランスミッターでエンコードされ、レシーバーでデコードされるので、途中のラジオ信号は保護されています。



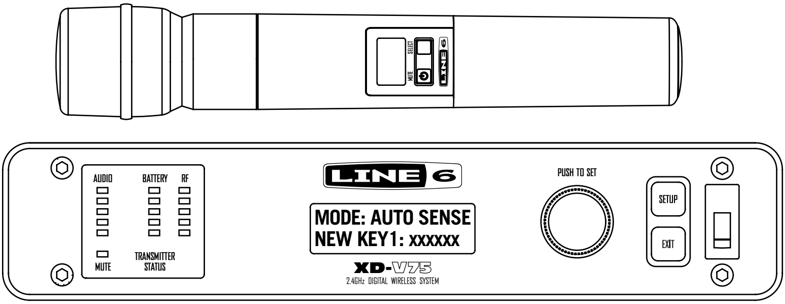
暗号コードはまずトランスミッターに入力され、レシーバーへと転送されます。トランスミッターとレシーバーの周波数が同じものに設定されていることを確認してください。

注:暗号コードを転送する際は、まず暗号化されていない状態で交信していないと機能しません。トランスミッターの電源が入っている状態で、チャンネル設定の画面が出るまで**SELECT**を押し続けてください。さらに**SELECT**を3回押して[CRYPTO]のページに行きます。暗号モードは[OFF]か[ON]のいずれかになって点滅しています。ハンドヘルドでは**ON/MUTE**、ベルトパックでは**VALUE**を押して[OFF]と[ON]を切り替えることができます。コードをセットするには[ON]を選択します。

注:[ON]を選択し、セットアップモードから出ると、トランスミッターは暗号化モードで送信を開始します。現在選択されている暗号化設定を変更せずにエディット画面を見たい場合、**ON/MUTE**または**VALUE**のボタンを押さずに**SELECT**ボタンを押すと、そのページは飛ばされ、次のエディットページに移動します。暗号化をオフにするには[CRYPTO]ページまで行き、**ON/MUTE**または**VALUE**ボタンを押して[OFF]にし、**SELECT**ボタンで戻ります。しばらくすると暗号化されていない状態に戻ります。

トランスミッターは、暗号用にランダムで自動的に6桁のHEXコード(0－9、A－F)を作成します。これはトランスミッターの電源を切っても記憶されています。このコードを消去するには[CRYPTO]ページを[OFF]にするしか方法はありません。このコードは[CRYPTO]を[ON]にした直後に**SELECT**ボタンを押すと一度だけ見ることができ、次のページに移動するために**SELECT**ボタンを再度押すまで、バックライトが点灯するディスプレイで2分間表示されます。**SELECT**ボタンが二度目に押された瞬間にトランスミッターは暗号モードに入ります。

同じチャンネルに設定されたXD-V75レシーバーに暗号コードを転送するには、レシーバーも暗号モードのページに入っている必要があります。**SETUP**ボタンを押して［SELECT FUNCTION］に行き、**ロータリー・エンコーダー**で［ENCRYPTION］までスクロールし、エンコーダーを押してその機能を有効にします。**ロータリー・エンコーダー**で［MODE：AUTO SENSE / NEW KEY 1: XXXXXX］（Aの文字に下線）までスクロールします。[NEW KEY 2] に行きたい場合、**ロータリー・エンコーダー**をもう一度押すとカーソルが数字の1まで進み、エンコーダーを回すと数字の2に行きます。再度**ロータリー・エンコーダー**を押すと6桁のコードの最初の文字まで進み、エンコーダーを回すたびに点滅して変わります。



注：レシーバーには2つの暗号「枠」が用意されており、同時にではありませんが、1つのレシーバーで2つの暗号化されたトランスミッターを使用できます。例えば、ハンドヘルドとベルトパックで違う暗号を一つのレシーバーで使用できます。トランスミッター側で暗号のコードが発生するので、[NEW KEY 1]を1つめ、[NEW KEY 2]を2つめにというように、それぞれ別々のコードを使用することができます。

暗号コードをレシーバーに転送するもっとも簡単な方法は、レシーバーの近く(数メートル以内）にトランスミッターを置き、トランスミッターでコードを作成する前に、まず前述の手順でレシーバーを暗号モードに入れることです。トランスミッターのディスプレイにコードが表示されている時、ハンドヘルドでは**ON/MUTE**、ベルトパックでは**VALUE**のボタンを押し続けるとレシーバーにコードが転送されます。トランスミッターのディスプレイにはSndという文字が表示されます。同時に、トランスミッターがコードをレシーバーに転送した後、レシーバー側で[MODE: AUTO SENSE]ページでカーソルがコードの1桁目にある状態で**ロータリー・エンコーダー**を押して、トランスミッターのボタンを離します。

注：トランスミッターが暗号モードに設定されていると、通常はCHと表示されているところが暗号されていることを示すCRに変わります。

また、手動でレシーバーにコードを転送することも可能です。トランスミッターのディスプレイに表示されるコードをメモしておくか、コードが表示されている2分間の間にトランスミッターをレシーバーまで持って行き、レシーバーの［ENCRYPTION］ページで手動で入力してください。[MODE：AUTO SENSE / KEY 1（または2）：xxxxxx］画面から手動で暗号コードを入力するには、最初のxに行くまで（点滅するまで）**ロータリー・エンコーダー**を押し、選択したい文字が出るまで**ロータリー・エンコーダー**をまわします。エンコーダーを再度押すと次の文字が変更可能になります。この手順を最後の文字が入力されるまで続け、最後に保存するためにもう一度**ロータリー・エンコーダー**を押してください。

注：トランスミッターからレシーバーへの暗号コードの自動送信は、非常に低いパワーでレシーバー付近で行うためとても迅速かつ安全ではありますが、コードが送信されることを嫌がるユーザーもいらっしゃるかもしれないこ

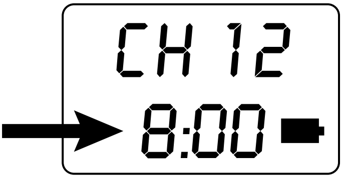
とを考慮し、手動で入力できる機能を備えました。また同じコードを入れたトランスミッターを2つ用意し、1つをバックアップとして使用するという使い方もできます。

現在暗号化されているトランスミッターを使用している間にそのコードを変えたい、または新しいコードを入れたい場合、まずトランスミッターの［CRYPTO］ページへ行きます。**ON/MUTE**または**VALUE**ボタンを使用して設定を［ON］から［OFF］にし、以前のコードをキャンセルするためにSELECTボタンを押します。**SELECT**ボタンを押し続けるとセットアップモードに戻るので、［CRYPTO］まで行き、［ON］を再度選択します。上記の手順でコードを確認し、手動または自動でレシーバーへ転送してください。

この作業中、トランスミッターで暗号化された信号をレシーバーが受信し、照合されたコードが保存されると、ディスプレイの上部右の角に小文字のcの文字が表示されます。レシーバーに正しいコードが入っていない、またはレシーバー側で暗号化がオフになっている場合、ディスプレイには[BLOCKED]と表示されます。レシーバーにコードが入力されるか、トランスミッターで新たなコードを作成してそれがレシーバーに転送されるまでオーディオを受信する事ができません。

バッテリーレベル・インジケーター機能

Line 6のトランスミッターには電池の残量を正確に判断し、トランスミッターおよびレシーバーにその情報を表示する機能がついています。このインジケーターは一般的なアルカリ電池で測定されているほか、充電式電池に対しても重要な情報を提供します。



トランスミッターの電源を入れると、ディスプレイの下段には電池の残量が時間と分で表示され、時間の横に電池のアイコンが表示されます。電池の残量は20分単位で表示されます(時間:20)。電源を入れたばかりの状態から最初の数分間は、実際の残量時間より多めに表示される場合があります。これは停止状態の後は一時的にボルテージが増幅するというアルカリ電池の特性から来るものです。もっとも正確な数字を得るには、トランスミッターの電源を入れて20分ほどたってから時間を確認してください。

レシーバー側では電池の残量はディスプレイのメイン画面の下部左の角に表示され、トランスミッターのインジケーターと同期します。さらに中央の5ポジションLEDメーターは1時間単位で電池の残量を表示します。電池の残量が5時間以上の場合は5つのLED、4時間と5時間の間の場合は4つのLEDが点灯します。電池の残量が1時間以下になった場合、下段のLEDは緑から赤に変わり、残り40分で点滅し始めます。

THH12およびTBP12トランスミッターでは2400－2800mAhのNiMH（ニッケル水素）充電池の使用が推奨されます。直径や長さが異なるものもあるので、バッテリー・コンパートメントにぴったりと合うことを確認してください。外部の充電器で充電してください。トランスミッターを使用中に充電できるようには設計されていません。トランスミッターのバッテリー・メーターはアルカリ電池の測定用に作られているので、充電式電池の残量を測定する場合はアルカリ電池ほど正確ではない場合があります。

注：マンガン電池の使用は推奨されていません。

レンジと干渉のテスト

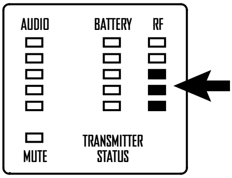
XD-V75 レシーバーに付いている周波数スキャン機能、ディスプレイに付いているA/Bアンテナメーター、およびRFのLEDは、クリアなチャンネルの選択、干渉の回避、ワイヤレス・マイクが他のワイヤレス機器と干渉することを防ぐことができるパワフルなツールです。新しい場所で使用する前にスキャンをすることで、支障のないスムーズな動作を確保します。

干渉がないかチャンネルをスキャンする

まずチャンネル・スキャニングの手順に従ってチャンネルをスキャンします。1-14のチャンネルは2.4GHz周波数帯の76MHz帯にわたって広がっていて、同じ周波数帯で動作している他の機器との干渉を最小限に抑え、問題なく使えるよう特別に選択されています。新しい場所で使用する際には、まずトランスミッターを全て切った状態でスキャンを行ってください。

スキャンが終了したらチャンネル・ディスプレイの結果を見て、半ブロックまたは全ブロックのアイコンが付いているチャンネルを確認してください。これは大幅な干渉がそのチャンネルにあること示しているため、そのチャンネルを使うとトランスミッターのレンジを制限してしまいます(そのチャンネルを使用するとトランスミッターが他の機器と干渉し合う事にもなります)。

RFメーターを使用した干渉の検出



XD-V75 レシーバーにはRFと表示されたLEDメーターがあり、現在設定されているチャンネルの周波数の信号を検知する事ができます(例えば、Line 6 チャンネル7に設定されていた場合、2.433GHzまたは2.467GHzの周波数の信号を検知します)。Line 6のトランスミッターから信号を受信している場合は緑に、トランスミッターの電源が切られていてその周波数に干渉する信号が検知された場合は赤く表示されます。レシーバーの電源が入っていて、関連しているトランスミッターの電源が切ってある際にRFメーターのLEDが1つ以上赤い場合、干渉を起こす可能性がある信号を受信しています。点灯しているLEDが多いほど信号が強いことを意味するため、そのチャンネルでトランスミッターを使用するとレンジや性能を妨げることになります。

A/Bアンテナ・ディスプレを使用した干渉の検知

レシーバーのディスプレイのメイン・ページには、関連するLine 6のトランスミッターから送信されている両方の周波数をアンテナAとBで受信している信号の強さが表示されます。トランスミッターの電源が切れている場合、干渉する信号の存在も表示されます。

ディスプレイでAとBの左右に表示される4本の垂直のバー(アンテナ・バー)はRF信号の増加を表します(一番高いレベルで4本のバー)。トランスミッターが切れている場合にバーが1本以上表示されると、ワイヤレス・システムのレンジやパフォーマンスを妨げる可能性がある干渉信号があることを表します。

XD-V75トランスミッターは同時に2つの周波数を使用するため、各文字の左にあるバーは2つのうち低い方の周波数を、文字の右にあるバーは高い方の周波数を示します。場合によっては2つの周波数の片方にしか干渉が発見されない場合もあります。下記の表は性能への影響の可能性を説明しています。

アンテナ・バー	Line 6の可用性の推定	干渉信号の強さ	Line 6の最大レンジの推定
4	Bad	>(-60dBm)	0-10ft
3	Poor	>(-70dBm)	1-25ft
2	Fair	>(-80dBm)	25-50ft
1	Good	>(-90dBm)	50-100ft
0	Excellent	No interference	>200ft

注：関連しているハンドヘルドまたはベルトパックの電源が入っている場合、レシーバーのアンテナで受信しているトランスミッターの両方の周波数の信号の強さが表示されます。通常の操作の場合、両側に4本のバーが表示されます。レンジを越え始めると表示されるバーは少なくなりますが、3本のバーでは優良な信号、2本のバーでも許容範囲の信号を受信し確実なオーディオを提供します。

動作範囲のウォーク・テスト

新しい場所にワイヤレス・システムを設置する場合、まず設置したいと思っている位置に設置した後、オーディオ・システムおよびトランスミッターを使える状態にし、動作範囲を歩いてみてください。話してみて、アンテナの位置に対して信号のドロップアウトなどの問題がないかを確認します。

何らかの理由で、オーディオ・システムを作動させてトランスミッターを持って歩く人、レシーバーをモニターする人、と作業を分担することができない場合、RFメーターを使用して低信号による不具合が起きる可能性がある場所を確認することができます。レシーバーが接続されていれば、ミキサーにヘッドホンを接続してモニターすることも可能です。

リモート・アンテナを使用している場合、置き場所を変えることによってレンジを強化したり、信号が低い場所をなくすことができます。アンテナがレシーバーに接続されている状態で、トランスミッターとの間に障害物がない（見通しが良い）場所に置き直してください。

注：それでも受信される信号レベルが低い位置がある場合、ユーザーが避けたほうが良い場所をガムテープなどで床にマークするといいでしょう。

WiFi干渉を避ける

チャンネル・スキャン画面で半ブロックおよび全ブロックが隣り合って複数表示されている場合、同じ場所で動作しているWiFiチャンネルが表示されている可能性が高いでしょう。その機器を見つけ、レシーバーおよびレシーバーのアンテナをその位置から離すことにより干渉は弱くなるかもしれません。またトランスミッターがルーターやほかのWiFiに接続されている機器の近くで送信していると、WiFiネットワークを邪魔してしまう場合もあります。強い干渉信号が見つかった際は、ほかのクリアなLine 6チャンネルを使用することが最良です。

もっとも一般的なWiFiチャンネルは1、6、11チャンネルです（Line 6のチャンネル番号とは合致していないことに注意してください）。これらの各チャンネルは20MHzの領域にわたっており、WiFiチャンネルは通常一カ所で1つしか使用されません。多くの場合、Line 6ワイヤレス・チャンネルは既存のWiFiと同時に使用しても全く干渉することなく（もしくは最小限の干渉で）使用でき、全ての場合においてWiFiチャンネルを完全に避けつつ8つのLine 6ワイヤレス・チャンネルを使用することができます。

注：WiFiやBluetooth機能を持つ携帯電話は2.4GHz帯域の信号を送信するため、レシーバーのアンテナ付近で使用すると干渉する可能性があります。ワイヤレス・システムをお使いの際は携帯電話のそうした機能は数メートル離れてご使用ください。

ニア／ファー・トランスミッター・エフェクトを最小限に抑える

Line 6 デジタル・ワイヤレス・システムは、同じチャンネルに設定されたトランスミッターから送信されたオーディオ信号のみレシーバー側で出力するように設計されています。同じチャンネルでなければ、付近で使用されている他のトランスミッターやRF ソースによってオーディオが作り出されることはありませんが、一定の条件下ではレンジに影響がある場合もあります。複数のワイヤレス・チャンネルを使用の場合は、簡単な手順でニア/ファー・トランスミッター・エフェクトを避けることができます。

XD-V75 レシーバーは常にトランスミッターから送信されている信号をモニターし、良質なRF 信号を保つためにトランスミッターが離れるに従ってゲイン（センシティビティ）が上がっていきます。レシーバーのアンテナからトランスミッターが離れ、別のチャンネルで使用しているトランスミッターがアンテナの付近で動作するとニア/ファー・エフェクトが起きる場合があります。特に使用している周波数が近いと、付近で使用されているトランスミッターからの強い信号が遠くにあるトランスミッターの信号をマスキングしてしまうことがあり、トランスミッターからのオーディオが途切れてしまう場合もあります。

例えば、レシーバーと同じチャンネルに設定されたトランスミッターが10メートル離れた場所にあり、別のトランスミッターをレシーバーのアンテナから1 メートル程度の距離で使用すると、遠くで動作しているトランスミッターのレンジが影響を受ける可能性があります。使用するトランスミッターに対し、レシーバーおよびアンテナの位置が同等な距離になるように再設置して不具合が起きるのを避けてください。

解決策：

- どのトランスミッターもレシーバーから少なくとも2 メートル離し、WiFi ルーターのようなRF ソースからも離れていることを確認する。
- アンテナをより高い位置に設置することで距離の差を少なくできる上、遠くで使用するトランスミッターとの見通しの良さを上げる事もできます。
- リモート・アンテナを使用し、各トランスミッター組と等距離になるように設置する（例えば、アンテナA に接続されているリモート・アンテナを近いトランスミッター用に、アンテナBに接続されているものを遠いトランスミッター用になど）。
- 遠くにあるトランスミッターと関連しているレシーバーを近くに設置する、またはリモート・アンテナを使用して近くに設置する。
- 近くにあるトランスミッター用にはトランスミッターのパワーセッティングをLOに設定し、遠くにあるトランスミッター用にはHI パワー設定にする。

アンテナの取り付けと配置

XD-V75 レシーバーはスタンド・アローンとして使用することもできますし、ラックマウントすることもできます。単体で使う場合は平らな場所に置き、アンテナは通常BNC コネクターで **ANTENNA A** および **ANTENNA B** と表示された裏面に接続します。ラックマウントするため、Line 6 ではロング・ラックマウント耳（アンテナをフロントマウントできるように付属のBNC コネクターを通す切り欠き付き）、レシーバーにアンテナを接続するためのBNCケーブルを2 本、1U のスペースにハーフラックのレシーバーを隣り合わせにマウントできる金具類を提供しています。レシーバーの背面でコネクターをループさせることで共有のアンテナ一組を複数のレシーバーで使用することが可能です。またオプションのリモート・アンテナも使用できます。

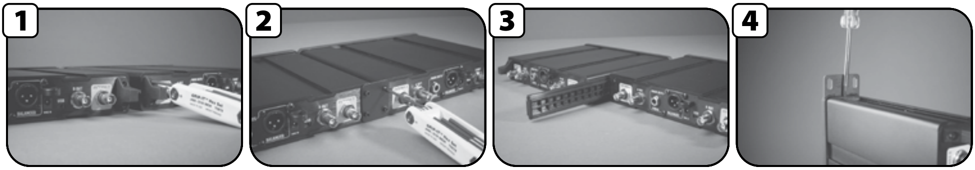
注：レシーバーをラックマウントする場合、最良のレンジおよび動作を確保するためにレシーバーおよびアンテナをラックの上部に設置し、障害物のない見通しの良い状態にすることが推奨されます。また、レシーバーやDSP、コンピューター、WiFi ルーター、RF 信号を送信するその他の機器はそれぞれ出来る限り離して設置してください。

フロントマウントされているアンテナとレシーバーをラックマウントする

XD-V75一台をラックマウントする場合、付属のショート・ラックマウント耳とロング・ラックマウント耳の両方を使用します。レシーバーはラックの左右どちらにもマウントすることが可能です。オプションのリモート・アンテナを使用しない場合はロング・ラックマウントキットに付属の半波長アンテナを取り付けることになります。ラックマウントキットのＤカットマウント穴が見えるようにゴムのカバーを外した後、六角ナットを外し、付属のBNC-BNCケーブルをのワッシャーをロックし、穴に通した後で六角ナットを締め直します。付属の4本のさらネジを使用し、レシーバー前部のアリ加工のスロットにラックマウントキットの90度のタブを取り付けてください。

アンテナをレシーバーに接続するには、付属のBNCケーブルの片方を**ANTENNA A**および**ANTENNA B**に、反対側を長いラックマウントキットの内側を向いているBNC-BNCコネクターに取り付けてください。全体をラックにネジで組み込み、電源とオーディオの接続をし、半波長アンテナをラックマウントの前部に設置してください。

ラックマウントおよびアンテナ－２つのレシーバー



二つのレシーバーを隣り合わせにマウントするには付属の「ダブテイルキー」を使用します。片方のレシーバーの溝に、背面から前方に向かって差し込んでください。キーはぴったりはまるので、多少力を入れるか、木槌で軽く打つ必要があるかもしれません。その際、レシーバーのむき出しになっているフロントパネルを傷つけないようご注意ください。次に2つめのレシーバーをダブテイルキーに差し込みます。最初のレシーバーの前部に近いキーから始め、2つのレシーバーのフロントパネルが合うまで押し込みます。

レシーバーの後部からダブテイルキーが突き出ている場合は木槌で軽く打ち、レシーバーの後部が平らになるようにしてください。2つのレシーバーが接触するリアパネルの中心にあるゴムの「バンパー」を1/8インチの六角レンチを使って取り外し、各レシーバーのねじ穴と並ぶように四角いはめ合わせブラケットを設置してください。ゴムのバンパーおよび取り外したネジを戻してください。

短いさらネジを使用し、ショート・ラックマウント耳を2つのレシーバーの両側に設置してください。レシーバーがまとめてマウントされている場合、各レシーバーでリモート・アンテナを使用するか、BNC-BNCケーブルでもう片方へループさせてください。

1つのレシーバーから次へループさせるには、まず最初のレシーバーのリアパネルの**ANTENNA A**および**ANTENNA B**のBNCコネクターにアンテナを接続します。次に、［A OUT］および［B OUT］コネクターから次のレシーバーの**ANTENNA A**および**ANTENNA B**のコネクターへ接続します。

注：最高のパフォーマンスを得るため、Line 6では1組のアンテナでレシーバーの裏にあるBNCポートでアンテナをループさせるのは4台のレシーバーまでにすることを推奨しています。次のレシーバー4台には別のアンテナ1組をご使用ください。または、アンテナ1組で複数のレシーバーを動作させせることができるLine 6アンテナ・ディストリビューション・ユニットを使用するか、別の2.4GHz帯域のRFディストリビューション・ユニットをご使用ください。

注：Line 6のリモート・アンテナはアクティブであるため、正常に機能するには同軸アンテナ・ケーブルによる電源供給が必要です。別のRFディストリビューション・ユニットを使用の際には、必要な電源が確保できることを確認してください。詳細はアンテナの仕様をご覧ください。

リモート・アンテナの配置

XD-V75デジタル・ワイヤレス・システムではリモート・アンテナを使用することができるため、都合の良い場所にレシーバーを置くことが可能です。トランスミッターが使用されている場所から離れた位置にレシーバーを置きつつ、良いRF受信のためにアンテナをトランスミッターの近くに設置することができます。トランスミッターとレシーバーの間に大幅な距離がある、壁や障害物がある、レシーバーが機材室や制作車両などに常設されているためトランスミッターがさまざまな位置や距離で使用されるなどの場合、リモート・アンテナは大変重要になってきます。無指向性および単一指向性（カーディオイド）の両タイプのリモート・アンテナが提供されています。

レシーバーにリモート・アンテナを接続するには、両側に適切なBNCコネクターがついているローロス50 Ohmの同軸ケーブルをご使用ください。アンテナは、トランスミッターが使用される場所で見通しの良い位置に設置してください。Line 6のP360無指向性およびP180単一指向性のアクティブ・アンテナはマイク・スタンドにマウントできる機能を備えています。ケーブルの片方をアンテナに接続し、レシーバーの背面の**ANTENNA A/ANTENNA B**のコネクターに最短距離で接続してください。

距離を測り、ゲインをアンテナに適した数値に設定してください（7.62メートルで6dB、15.24メートルで15dB、30.48メートルで36dB）。接続が完了してレシーバーの電源が入ったら、アンテナの前部にある青いライトが点灯していることを確認してください。アンテナの設置が終わったら、干渉やドロップ・アウトがないかを確認するためにレンジ内をウォーク・テストしてください。レシーバーをループすることにより、このアンテナにさらに3台までレシーバーを追加することが可能です。

注：RF信号がケーブルを通ってレシーバーまで到達する間に信号レベルは多少失われるため、長いケーブルやロスの多いケーブルでは損失が大きくなる場合もあります。パッシブ・アンテナを使用する場合、なるべくローロスのケーブルで5メートル以内の長さのものを使用してください。ゲインを加えてくれるアクティブ・アンテナの場合、ケーブルの長さに適切な増幅の設定をし、30メートルを超える長さのケーブルは避けるようにしてください。

正しく使用すれば、ラックのフロント・マウントやレシーバーに接続された半波長のアンテナに比べ、リモート・アンテナはレンジを広げてドロップアウトや干渉を下げます。レシーバーの位置があまり見通しの良い場所ではない、障害物がある、などの場合は特にそうです。

無指向性のアンテナは、アンテナの前後や横などの広いエリアに送信する際に便利です。単一指向性のアンテナはアンテナの前方での使用に適しており、後方からの信号を排除します。P180は、カーディオイド・カバレッジ・パターンが約90度で横が削られているため、ユーザーのエリアが限定されていてあまり動きまわらない場合にお使いください。また、干渉する信号のソースをアンテナの後方に向け、トランスミッターをアンテナの前方に向けることによって干渉を最小限に抑えることもできます。

トランスミッターの距離が非常に近かったり、複数のトランスミッターが付近で使用されている場合（例えば隣接した劇場で使用されているなど）リモート・アンテナを使用してトランスミッターをLOパワーで使うことにより干渉を最小化することができる場合があります。ただし、トランスミッターにより近く見通しのよい位置に設置されたことで得られる改善された信号が、長いケーブルを使うことで大幅にロスされないよう注意してください。

APPENDICES

トラブルシューティング

オーディオが来ない	トランスミッターおよびレシーバーの電源を入れる。 トランスミッターの電池を入れ替える。 トランスミッターの電池の極性の確認。 トランスミッターのオーディオがミュートされている；MUTE ボタンを押してミュートを解除。 トランスミッターとレシーバーが別のチャンネルに設定;同じチャンネルに設定し直す。 トランスミッターが暗号化されレシーバーがされていない(または暗号コードが違う) レシーバーがチャンネル・スキャンまたはチャンネル・セレクト・モードである。 レシーバーがオーディオ・システムに接続されていない、またはオーディオ・システムがオフまたミュートされている。
	トランスミッターがロックされている；ロックを解除してから電源を切る。
レンジが狭い	アンテナがレシーバーに接続されていない；接続の確認。 レシーバーのアンテナの見通しが良くない；上に上げるか障害物をどける。 他のソースからの干渉；チャンネルを変える、マニュアルのニア・ファーを参照。 レシーバー / アンテナを WiFi などその他の 2.4GHz ソースから離す。
信号のドロップアウト	トランスミッターとレシーバー間の距離が遠すぎる；もっと近づける。 トランスミッターを HI パワー・モードにする。 リモート・アンテナでトランスミッターに近づける。 レシーバー / アンテナを高く見通し良く設置する;ドアや壁などの障害物がないようにする。

ファームウェア・アップデートの手順

XD-V75 には USB ポートが付いており、新バージョンが発表された際にはレシーバーおよびトランスミッターのファームウェアをアップデートすることができます。詳細は Line 6 の Web サイトをご覧ください。(www.line6.jp)

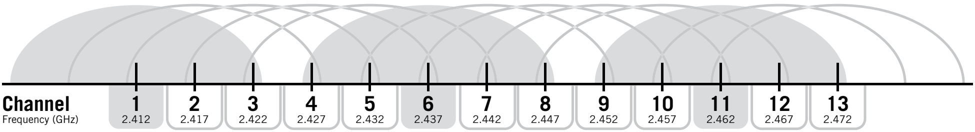
また XD-V75 レシーバーは、XD-V70 世代のトランスミッターの機能拡張や XD-V75 レシーバーとの互換性の向上、XD-V70 レシーバーの CPU (XD-V30、Relay™ G30、Relay™ G50 および Relay™ G90 のレシーバー / トランスミッターも含む) のアップデートにも使用できます。XD-V70とXD-V75を同時に使用する際、旧型の機器を最新のファームウェアにアップグレードすることが推奨されます。詳細は弊社 Web サイトをご覧ください。

チャンネル RF 周波数チャート

以下の表にはチャンネル1から14で使用される周波数が記載されています。信頼性の向上および冗長化のため各チャンネルは2つの周波数を使用します。これらの周波数には互換性があり、WiFiが使用されている環境でも利用できるように選択されています。最良のパフォーマンスを得るには、トランスミッターおよびレシーバーをWiFiルーターやコンピューターの付近に設置しないでください。

Channel	Frequency A	Frequency B	Compatibility
1	2425	2475	Compatible with WiFi 1, 6, & 11
2	2422	2472	Compatible with WiFi 1, 6, & 11
3	2402	2450	Compatible with WiFi 1, 6, & 11
4	2447	2478	Compatible with WiFi 1, 6, & 11
5	2428	2453	Compatible with WiFi 1, 6, & 11
6	2430	2461	Compatible with WiFi 1
7	2433	2467	Compatible with WiFi 1
8	2436	2469	Compatible with WiFi 1
9	2413	2456	Compatible with WiFi 6
10	2416	2458	Compatible with WiFi 6
11	2407	2464	Compatible with WiFi 6
12	2405	2439	Compatible with WiFi 11
13	2419	2444	Compatible with WiFi 11
14	2410	2442	Compatible with WiFi 11

以下のチャートはWiFiのチャンネルを表示しています(最も一般的な1、6、11チャンネルがハイライトされています)。



XD-V75 デジタル・ワイヤレス・システムの詳細

システム

周波数	2.4GHz ISM バンド
互換性のあるチャンネル	14
トゥルー・ダイバーシティ	採用
周波数ダイバーシティ	採用（各チャンネルにつき2周波数）
コンパンダー・フリー・デザイン	採用
周波数レスポンス THD%	10Hz（－0.5dB）－20kHz（－2.5dB）0.03% typical
システム・レーテンシー	<2.9ms（オーディオ・インプットからアウトプットまで）
動作温度	1～50℃
構造 XD-V75 レシーバー THH12/TBP12トランスミッター	 押出アルミニウム筐体 金属エンクロージャ

レシーバー

レシーバー・ゲイン・コントロール	0dBノミナル；－18～＋12dBレンジ
RFパフォーマンス・モニタリング	搭載（LCDスクリーンおよびLED）
スキャンおよびチャンネル・マネジメント	搭載（LCDスクリーンおよびファンクション・メニュー）
RF信号の強さインジケーター	5セグメントLED
オーディオ・レベル・メーター（レシーバー側）	5セグメントLED
ダイナミック・フィルター	搭載（選択可能）
スケルチ／パッド調整	不要
レシーバー・アンテナの数	2
レシーバー・フォーマット	1/2U（付属のラックマウントキット）
レシーバー・パワー条件	9Vdc 500mA
アウトプット・インピーダンス	XLR: 150 Ohm バランス 1/4インチ：1kOhmアンバランス
センシティビティ	－95 dBm
イメージ・リジェクション	56 dB
アンテナ・ディストリビューション	A/B イン／アウトBNCコネクター
アンテナ・インピーダンス	50 Ohms

トランスミッター

トランスミッター RF アウトプット・パワー	10 mW HI; 3.3 mW LO
電池持続時間	8時間
マイク・モデリング THH12ハンドヘルド TBP12ベルトパック	 搭載（10モデルを選択可能） 搭載（EQフィルター 9種を選択可能）
電池	2× 単三アルカリ電池
電池ディスプレイ（トランスミッター側）	LCDスクリーン
ダイナミック・レンジ THH12ハンドヘルド TBP12ベルトパック	 >115 dB >120 dB
TBP12最大オーディオ・インプット・レベル	6.5 Vpp
TBP12ベルトパック・インプット・インピーダンス	1.3 M Ohms
TBP12ベルトパック供給バイアス・ボルテージ	5VDC（TA4Fコネクターのピン2）
トランスミッター電池極性	マイク・ダイアフラムに正圧力で正電圧を発生

TBP12ベルトパックからTA4Fコネクターへのピンアウト

TBP12ベルトパック・トランスミッターで他のヘッドセット、ラベリアまたは楽器マイクおよびケーブルを使用する場合は、以下の配線プロトコルをご使用ください。

- TA4 ピンアウト
- 1 = GND
- 2 = V+
- 3 = シグナル
- 4 = Z（ラベリアマイクではこのピンを信号へ、ギターではグラウンドまたはオープンにします）